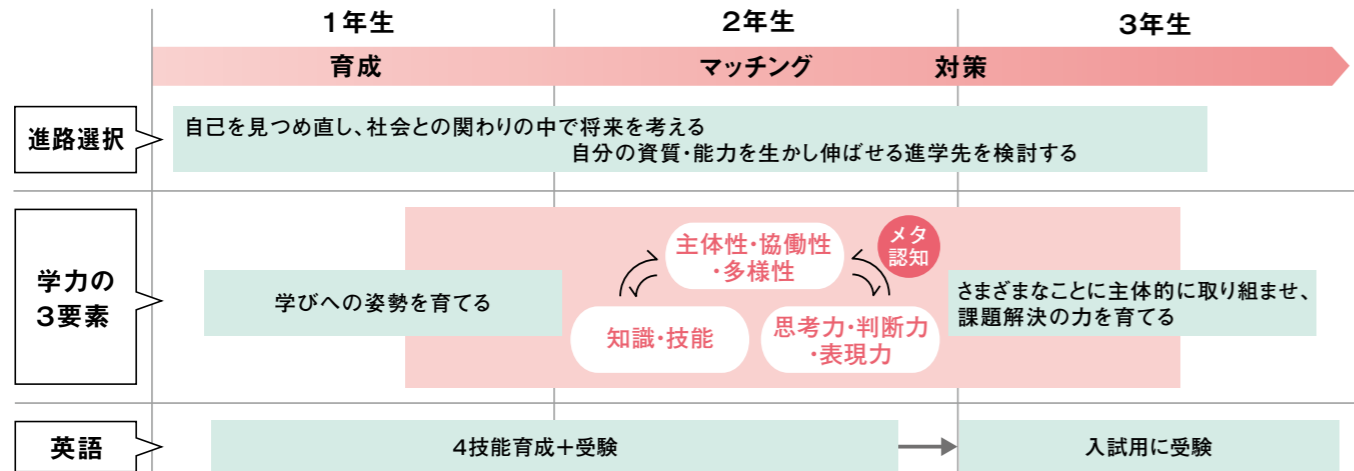


高校教育と進路選択の変化



1 早期化
英語外部検定が大学入試のスタートに

これまで2年次後半から3年次前半にかけて行われてきた進路選択は、2年次前半、あるいは1年次にまで前倒しされます。その要因の一つは、英語外部検定の入試利用の導入です。*参加試験は3年次の4〜12月の受験結果を使うため、2年次の後半にはある程度志望大を想定したうえで、いつ、どの検定を受けるかを決めることとなります。多くの高校生は検定に慣れるために高1のうちから受験するでしょうから、低学年のうちから進学先を意識せざるを得なくなりました。もう一つの要因は、学校推薦型・総合型選抜のスケジュールが一般選抜に近づき、かつ知識・技能を測る試験を課すことも求められていることです。「早く、楽に決めてしまいたい」との理由から安直に学校推薦型・総合型選抜を受験する層は減るでしょう。早期から学校推薦型・総合型選抜か一般選抜のどちらかに狙いを絞り、対策期間をできるだけ長く取らせる進路指導が増えそうです。

2 マッチング化
基準は偏差値ではなく自分に合うかどうか

従来型の、少しでも偏差値の高い大学をめざさせる受験指導に代わり重視されてきているのが、各生徒の資質・能力や、大学あるいは社会でやりたいことを基に進学先や入試方式を見極める、マッチング重視の進路選択です。この背景には、多くの高校が新学習指導要領への移行を前に、「何が得意になるか」「社会とどう関わりたいか」という視点で生徒の資質・能力を育成し始めている事情があります。一方、大学側はどうでしょうか。入試改革で求められている多面的・総合的評価の詳細や、それと連動した入学後の育成プランとそのエビデンスなどを公表している大学は少ない状況です。高校はマッチングに足る情報を得られていません。そんな中、先行してそれらを明示した大学は高校の注目を集め、ポジティブな印象を持たれているようです。特に教育力を売りとする中堅大学にとっては、入試が変わる今こそ、自学の教育を打ち出すチャンスと言えます。

3 生徒基点化
生徒自ら主体的に動き過程や成果を客観視

新学習指導要領において高校に求められていることは、「カリキュラム・マネジメントを行い、生徒の資質・能力の向上を図る」ということ。これを受けて各高校では、探究学習をはじめとする「生徒が主語」の教育に取り組んでいます。教員が一方的に教えるのではなく、生徒が自分で考えて動くように促す。そのために「メタ認知」——自分の変化を客観的に見て表現できるようにするといった学び方が注目を集めています。とある私立中高一貫校の三者面談が象徴的です。そこでは保護者と教員に対し、生徒がポートフォリオを基に、成長のプロセスや得た学びから考えた希望進路をプレゼンするのです。このように進路選択も教員による指導型から生徒基点型に変わりつつあります。一方、通行的な指導に比べ教員には高いスキルが求められるため、今高校では研修が盛んに行われています。メタ認知を取り入れた学習は保護者からの期待も高く、多くの高校に広まりつつあります。

*[大学入試英語成績提供システム]の参加試験

「今」高校改革の

教育・経営の多様化、進化

教職員世代が通っていた頃の高校像は、そこにはない。指導も、経営も、生徒・保護者の志向も、もはや別物だ。「三位一体の高大接続改革」で、大学の入試は変わったか。教育は変わったか。高校は、確実に、変化を遂げている。

3つのキーワードで読み解く高校の変化 ～教育と進路指導はどう変わったか？



(株)進研アド
マーケティング企画室
進路データベース部長

高橋 諒

たかはしあきら ● 2013年(株)ベネッセコーポレーション入社。高校事業部にて関東圏の進路多様校中心に約200校の教育改革支援を行う。2019年より現職。

取材・文/見山雄介 撮影/亀井宏昭